

# シリアのクルド人

## ——現状と歴史の概観——

森山 央朗

### ●現状の概観

シリアにおけるクルド人の人口は、総人口（推計約2200万人）の約5%から20%と推計される。推計の大きな幅の原因の1つは、推計者の立場の違いである。アラブ民族主義者はクルド人の割合を少なく見積もろうとし、クルド民族主義者は多く見積もろうとする。欧米の研究者・調査機関は7%から10%と見積もっており、シリアには200万人前後のクルド人が暮らしていると理解するのがとりあえず妥当であろう。

シリアにおけるクルド人は、北東部のイラク・トルコ両国との国境地帯に位置するハサカ県と、北部のトルコ国境に沿った山々の南麓を主な居住地域としてきた。トルコ国境に接するコバニ（アイン・アル＝アラブ）は、2012年から2015年にかけてクルド民族主義勢力とISとの攻防戦の舞台になり、国際的な注目を集めた。これらの地域は、国境を挟んでイラク北部とトルコ南東部のクルド人居住地域と連続しており、イラン西部からトルコ東部へと、イラン、イラク、シリア、トルコの国境をまたいで広がる「クルディスタン」（クルドのくに）の西部に当たる。シリア内戦（2011年～）のなかで、ハサカ県やコバニを支配するようになったクルド民族主義勢力は、これらの地域を「ロジャヴァ」（クルド語で「西」の意）と呼び、2014年頃から実質的な自治区としている。

とはいえ、シリアにおいてクルド人が暮らしてきた地域は、ハサカ県やコバニだけではない。ハサカ県やコバニは牧畜と農業を主な産業とする地域であり、20世紀後半から進展した都市化・工業化にともなって、多くのクルド人がダマスカスやアレッポといった西部の大都市に移住した。西部の大都市に移住したクルド人のなかには、最下層の単純労働者も少なくないが、政治家、官僚、軍人、技師、学者、芸術家、宗教家などとして成功し、高い地位と豊かな生活を手にした者

も珍しくない。

クルド人の人口推計にみられる大きな幅は、推計者の立場の違いにのみ起因するのではなく、クルド人の多様性と「クルド人とは誰か」という根本的な問題ともつながっている。近代的概念としての民族は、言語、文化的伝統、遺伝的特質を共有すると想像する／される人々の集団と想定される。したがって、クルド人とは、クルド語を母語とし、先祖から「クルド的」な文化伝統と風貌を受け継いだと自らを想像する、もしくは周囲から想像される人々ということになる。しかし、これらの要素は常に一致するわけではない。代々のクルドの村に居住し、クルド語で日常生活を送る人々だけをクルド人とみなすと、クルド人口の割合は少なくなる。逆に、西部の大都市に移住し、クルドの出自であることを認めつつもクルド語を話さない／話せない人もいる。こうした「クルド系」を含めれば、クルド人口を多く見積もることができる。

また、「クルドの文化的伝統」についても、内実は多彩で曖昧である。たとえば宗教をみると、クルド人の多数はスンナ派イスラームの信者である。しかし、シーア派イスラーム、シリア教会などのキリスト教諸教派、ユダヤ教、そしてISの被害者として耳目を集めるようになったヤズィード教などを信仰するクルド人も相当数いる。1つの民族に複数の宗教がみられることは一般的ではあるが、「クルドの文化的伝統」を1つの宗教に強固に結びつけられないことも確かである。つまり、クルド人を定義する明瞭な基準があるわけでも、クルド人その他の人々を分ける明確な文化的境界線があるわけでもないのである。しかしそれでもなお、クルド人は多数派のアラブ人に対する有力な少数民族として意識されてきた。以下では、シリアにおけるクルド人の歴史をみてみよう。

## ●歴史の概観

クルド語は、20世紀に入るまで文字に書かれることがほとんどなかった。そのため、クルドに関する歴史記述は、都市の学者がアラビア語などで書いたものに限られる。クルドに関する最初期の記述は9世紀のアラビア語の書物に遡り、イラン西部やイラク北部の山岳地帯で複数の部族に分かれて半牧半農の生活を営む、剽悍な人々と語られた。

クルドがシリア北東部・北部へと居住地域を広げたのは、12世紀にイラク北部からシリアに進出したザンギー朝(1127~1251年)が、イラク北部のクルド諸部族を軍隊に動員したためと言われる。ザンギー朝に代わってシリアを支配したアイユーブ朝(1169~1250年)の初代君主、サラフ・アッ=ディーン(サラディン、在位1169~93年)は、十字軍からエルサレムを奪還したことで有名であるが、彼の軍隊の主力もクルド諸部族であり、自身もクルド系と考えられている。アイユーブ朝の滅亡後、シリアの支配はマムルーク朝(1250~1517年)からオスマン朝(1299~1922年)へと移り変わった。マムルーク朝とオスマン朝は、クルド諸部族を軍の主力に動員することはなく、辺境の粗暴な人々として警戒した。コバニから南西へ進むと商都アレppoに至るが、13世紀以降のアレppoの地方史のなかには、出入りの隊商や周辺の町や村がクルドに襲われたとの話が散見される。

クルドに関する歴史記述をみていくと、19世紀に至るまで、クルドであることは、言語や文化伝統によって想定されるというよりも、生活地域や行動によってイメージされたとの印象を受ける。すなわち、都市の洗練から隔絶された山や丘の谷間に暮らす「まつろわぬ民」といったイメージである。逆に言えば、クルド部族の出身であっても、都市に出て政権の支配に従い、洗練と教養を身につけた者は、もはやクルドと認識されなかったようである。また、クルドと呼ばれることは、悪く言えば山賊のような者とみなされることであり、自ら誇りを持ってクルドと名乗ることもあまりなかったと考えられる。

こうした状況が変わって、クルド人としての民族的な誇りや権利を主張するようになるのは、19世紀末から20世紀初頭にかけてである。その背景には、近代的な民族概念の浸透と帝国主義という世界的現象があげられる。第1次世界大戦後、シリアを委任統治下に置

いたフランスは、多数派のアラブ人の民族主義の勃興に対して、有力な少数民族としてクルド人の民族主義を刺激し、反植民地運動を抑えるための現地人部隊にクルド人を優先的に登用した。分断統治によって育まれたクルド民族主義とアラブ民族主義の対立は、シリア共和国の独立(1946年)後に持ち越され、政治的不安定の要因となった。

その後、イスラエルとの戦争や汎アラブ主義に基づくエジプトとの合邦(アラブ連合共和国、1958~61年)とその解消を経て、1961年にアラブ民族主義を国とするシリア・アラブ共和国が成立すると、クルド人に対する差別的な政策が強化された。アラビア語の強制や国籍剥奪、クルド人所有地の没収、クルド人居住地域へのアラブ人の入植などである。これらの差別的な政策に対して、クルド民族主義者たちは様々な政党を組織して対抗を試みたが、政府からの弾圧に直面した。1971年から続くアサド政権は、クルド人に対する制度的差別を継続しつつ、一律に弾圧するのではなく、一部のクルド人有力者を取り込み、一部を抑圧することで、クルド民族主義勢力の結集を阻害した。そのため、多くのクルド人にとってクルド民族主義への積極的関与が難しい状況となり、トルコやイラクにおけるようなクルド民族主義に基づく組織的反体制運動が顕在化することはなかった。

そのアサド政権の支配が2011年からの内戦で緩むと、クルド民族主義勢力は、イラクの同胞と連携しながら、北東部・北部のクルド人居住地域に支配地域を確立した。そして、ISに対抗できる現地勢力として欧米の期待と援助を集めたことで、急速に存在感を高めている。しかし、クルド民族主義勢力の支配地域は牧畜と農業以外の産業に乏しく、外部からの援助なしに経済的自立は難しい。また、ここまで見てきたとおり、何をもってクルド人となるかは曖昧であり、クルド人となり得る人物が、自分をクルド人と表明するか、あるいは、周囲がその人物をクルド人とみなすかは、多分に状況に依存してきた。したがって、クルド民族主義勢力が存在感と支配地域を維持拡大できるかは、クルド人であることが有利な状況が続き、「クルド系」の人々をもクルド人として覚醒させることができるかに左右されるともいえるだろう。

(もりやま てるあき／同志社大学神学部神学研究科准教授)